保育内容（環境）のこと
～授業展開からの考察～

篠　永　　洋

The Child Care Studies (Environment)
A consideration from the class developed

Hiroshi SHINONAGA

ABSTRACT

This research is based on actual classroom practice for the students from the first grade level of Department of Child Development and Education, Faculty of Wellness Studies, Kwassui Women's University. The class is focused on becoming conscious of cultivating children's sensibility in everyday life. One of the next actions will be practice teaching with 5-year-old children as the last part of the project. This paper describes the processes involved in the classroom practice as well as on how it became an opportunity for awareness and growth among the students.

はじめに

辞書によると、「環境」は『まわりを取り巻く周囲の状態や世界。人間あるいは生物を取り囲み、相互に関係し合って直接・間接に影響を与える外界。』（大辞泉より）とある。

厚生労働省が発行する「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の教科の目標や内容を記した「別添１」の中にも「環境」という言葉は45回出てくる。それは、全ての科目の中にまんべんなく入り込んでいる。

保育所保育指針第３章「保育の内容」において､「ウ　環境」の欄には以下のように記されている。

ウ　環境

周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持って関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

（ア）ねらい

①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。

②身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。

③身近な事物を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

この「保育内容（環境）」を担当することになったとき、保育士養成協議会の研究大会や保育学会の発表でいろんな先生の授業実践を見て回った。授業の方法は様々であり、学生に対してどのような【仕掛け】を繰り出してゆくか､本当にその先生によって様々であった。「環境」という言葉が、

保育士養成課程における様々な科目の中で使用されているように、この言葉が持つ広い意味を「領域（環境）」の枠の中にどのように収めて学生に伝えることが出来るのか。まずは、自分の専門である造形表現寄りの方法を取ってゆくこととした。

保育所保育指針第３章のねらいを学生自身が感じ取り、自らが行う保育の中でその内容を押さえて展開してゆけるように、季節が変わってゆく秋から冬にかけて実施される後期15回の授業の内容がしっかりと一続きになっていることを意識してもらえるよう工夫を重ねた。授業の流れと内容を記し、学生の＜振り返りシートの記述＞から学生がどのような学びを得ることが出来ていたかを考察してゆく。

１．授業展開

15回の授業の流れは表１の通りである。保育者を目指す学生にとって、様々な環境に触れ、五感を研ぎ澄ますことはとても重要な課題でもある。まずは身近な自然環境に触れる活動からスタートし、自然物や学内にある「もの」を１枚の環境マップとしてまとめる。その後、学外へと視点を広げて学外のお散歩マップを作成する。その際、ひとつのテーマを決めて、それに沿った内容とすることとした。前半の授業のまとめはその２枚のポスターを掲示し、ポスター発表形式で学生同士の気づきや学びをシェアする。授業の折り返し時期には学外の長崎県美術館へ出かけ、地域の施設をどのように活用するかについて教育普及担当者からレクチャーを受けた。子どもと共に美術館へ出かける際のポイントやどのような言葉かけが必要であるかなど、普段見ることが出来ないバックヤードの見学も含めて刺激的な体験となっていた。振り返りの後は前半に作ったお散歩マップを基に「すごろく」を作成し、５歳児と遊ぶ活動へと繋げていった。以下、15回の授業内容と学生の振り返りを記す。

（1）色日記（課題・予習）

身近な環境に、意識的に関わることを実践してもらうために、毎回色日記の課題を出した。これは、毎週ひとつの「色」に視点をおいて生活し、日常生活の中で見つけたその「色」を写真に撮って採集する。週明けの月曜日深夜までに採集した写真から１枚を選び、タイトルとコメントを付けて提出。水曜日の授業では毎回提出した全員の写真をそのテーマに沿って選曲した音楽と共にスライドショーとして上映し、その中から数名の写真を選びコメントを加えながら紹介した。

全15回中、ポスター発表や、実践、学外での授業時などを除いた10回について課題を出し、全員で写真を共有した。

回数	内容	色日記
1	オリエンテーション領域【環境】とは	
2	自然観察①　学内フィールドビンゴ	赤
3	自然観察②　森のごちそう	青
4	自然観察③　学内環境マップ	黄
5	自然観察④　学内環境マップのまとめ	緑
6	自然観察⑤　学内環境マップのまとめ	朱
7	自然観察⑥　学内環境マップの発表	
8	地域環境や地域の人々①長崎県美術館	
9	地域環境や地域の人々②ふりかえり	黒
10	数・量・図形①　すごろくの設計	白
11	数・量・図形②　すごろくづくり	金
12	数・量・図形③　すごろくづくり	銀
13	数・量・図形④　すごろくの実践①	冬色
14	数・量・図形⑤　すごろくの実践②	
15	すごろくのふりかえり～まとめ	自分色

＜表１＞

（2）自然観察～学内フィールドビンゴ

入学して半年が過ぎているが、この活動を通して、学生たちは意外と学内のことを知らない（みていない）ということに気付く。また、普段意識していない「こと」や「もの」をキーワードに入れ込むことで、そこへ目を向けさせることをねらいとし、今後の授業展開に必要な意識を持っても

らうようにした。

大学の敷地内にある「もの」などに関するキーワードを25個用意し、5×5の計25マスに各自キーワードを書き入れてもらった（真ん中はFree）。そのペーパーを持って大学内を歩き回りながら、キーワードと一致するものを探し写真を撮る。学生たちは最初、キーワードの多さに気圧されて、一寸無理かもと思いながら教室を出て行く。しかし友だちとあーだこうだ言いながら歩き回るうちに徐々に楽しくなり、ビンゴを作るというよりもコンプリートを目指すようになってくる。キーワードにチェックを入れる度に写真も撮るようにしてもらい、最終的にその日のベストショットをコメントを付けて提出してもらった。その中でも「風の音」や「機械の音」「水の音」、「くさい匂い」や「いいにおい」など、写真として表わしづらい音や匂いをあえて提出している学生もいた。

＜振り返りシートの記述＞より

- 難しそうだなと思ってたけど、やりだすとみな違うのを見つけたいなとか、とても楽しみながら探すことができました。普段は注目して見ないところとかに注目することが多くて、機械の音やギザギザの葉っぱがお気に入りです。みんなで学内を歩き回ることで、小学生の時を思い出しました。
- ドアノブの色なんて考えてもみなかったので本館の学生ホールの近くの部屋が金色だったことにちょっと驚きました。
- 人によって感覚が違うんだなと改めて感じました。例えば「水」といっても水道の水を撮る人もいれば流れている外の水を撮る人もいて、個性が出るなと思いました。こういう自分の感覚で撮るものは正確な、正しい答えが無いのでこういう感じの授業が好きです。

（3）自然観察～森のごちそう

前回行ったフィールドビンゴで意識的に学内の「もの」を見て回ったが、その中にも自然物に関するキーワードがいくつか含まれていた。（ぎざぎざの葉っぱ、屋根より高い木、赤い花　など）今回はその自然物にフォーカスを絞った活動である。

ひとり１枚紙皿を渡し、その皿の上に学内の自然物のみでごちそうを作る活動である。樹を見上げたり、植え込みの落ち葉を集めたり、しゃがんだり、ちぎったり、普段の生活と違うアイレベルで学内の自然環境に向き合う。出来上がったごちそうを撮影してメールで提出してもらった。授業後半ではそのごちそうの素材を画用紙に並べて貼り付け次回までに素材（植物）の名前を調べてくる課題とした。学生たちは紙皿の上に葉っぱ、木の枝、石などを使ってシーザーサラダ、トルコライス、ハンバーグステーキ、チンジャオロースなど様々なメニューを表現し、提出してきた。

（4）自然観察～学内環境マップ

「学内フィールドビンゴ」と「森のごちそう」。この二つの活動で普段より意識的に学内の環境に触れた学生は、各グループに分かれて自分たちが採集したキーワードに沿った「もの」や「自然物」をまとめ、学内の環境マップを作成した。大学の見取り図に自分たちがみつけた様々な要素を書き入れ、グループそれぞれの視点でまとめた学内の環境マップが完成した。

写真１

（5）自然観察～学外環境マップ

前回作った学内の環境マップより、少し行動範囲を広げて、大学周辺の環境マップを作成した。必ず一つのテーマを設定し（例：眺めの良い場所、病院、コンビニ、赤など）グループごとにオリジナルのマップを作成した。ベースとなる地図はこちらで拡大したものを準備したが、そこに貼り付ける写真とキャプションについてはネットから拾うのをNGとし、自分で撮影した写真のみ使用するようにした。

写真２

（6）自然観察～ポスター発表

グループごとに作った環境マップをポスター形式で発表。

学内フィールドビンゴ～森のごちそう～学内環境マップ～学外環境マップ（お散歩マップ）までの活動を、ポスター発表という形式で振り返りの機会とした。学生たちは、普段生活している大学内の環境や大学周辺の通学路となっている道、ちょっと遊びに出るときに通る道など、それぞれが視点を持って調べ、取ってきた写真を並べながらまとめてゆくことでグループ内での共通認識をはかることが出来ていた。ポスター発表の振り返りシートからいくつかの記述を抜粋する。

＜振り返りシートの記述＞より

- 普段通る道にも様々な発見があった。
- 長崎に住んでいても、知らない場所やものがあって知ることが出来たのでよかった。
- 言葉にすることで改めてわかることがあるなと思いました。
- 自分で発表してみて「こんな質問されるのか！」とびっくりした。あらかじめいろんな質問を想定して調べないといけないなと感じました。

（7）地域環境や地域の人々～長崎県美術館

前半の授業では、主として自然観察を。後半の授業ではものの性質や数量、言葉等に対する感覚を豊かにすることについて触れてゆく。その丁度中間に幼稚園教育要領と幼保連携型認定こども園教育・保育要領で取り扱われている「生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心を持つ」ということで、大学周辺の身近な施設として長崎県美術館の見学を組み込んだ。多くの学生は普段美術館へあまり足を運ぶことは無い。保育者としての視点で美術館を見学することで、美術館という存在が敷居の高い特別な場所では無く、気軽に楽しめる場所であることを知ってもらうことが出来た。また、子どもたちと地域の施設を利用することの実際はもちろんだが、展示の「順路」という作品を効果的に見せる方法（すごろくの展開方法との連想）についても気づきを得て欲しいという狙いも含まれている。

＜振り返りシートの記述＞より

- 普段美術館を利用するのとは違い、もし自分が保育者の立場だったら子どもたちが自由に美術館を楽しむためにどのような援助が出来るか。またそのような援助をするために自分が子どもの立場になり、興味を持つ点など二つの側面から美術館を見ることが出来ました。
- 美術館を回りながら、担当の方が子どもたちと回ったときの様子やどのような行動を取っていたのかをたくさん話して下さりました。展示されている絵をみるとき、先生たちが楽しんでいれば

子どもたちにもそれが伝わると教えて頂いてやはり子どもは大人のことをよく見ているのかなと改めて感じました。

- 美術館の方のお話しの中で印象に残っている言葉が「幸運にも美術館に来れた子どもたちが･･･」という言葉です。何かの話の中でさらっと言われた言葉でしたが、印象に残っています。小さい頃から美術館で様々な美術作品を見たり、イベント等でいろんな素材や質感を感じることが幸運なことなのだと気づくことが出来ました。

（8）数・量・図形～すごろくづくり

前半の授業で作成し、ポスター発表した環境マップを元にして、すごろくを作成する。（写真３）すごろく特有の要素（１回休み、○○戻る など）が加わることでマップを作るために調べた情報をさらに深化させることとなった。

すごろくで使用する駒は同時期に開講している造形表現の授業で作成した「自分の小型」（スチレンボードに自分の前後の全身写真を貼り付けたもの）を使用した。これはこの後一緒に実践する子どもたちの駒も同様に学生たちが作成し、準備した。（写真４）

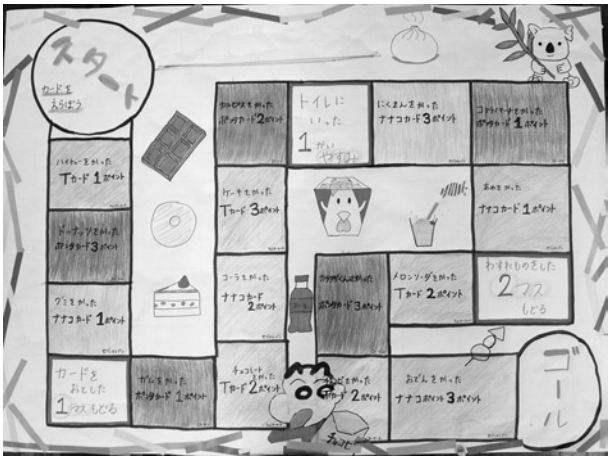

写真３

（9）すごろくの実践（学生同士で）

作成したすごろくを卓球室の床に並べ、学生同士で試遊した。その際、「１番に上がった人」と「最後に上がった人」のタイムを計測し、初めてそのすごろくで遊ぶ人がどれくらいの時間でゲームを終えるのか、最初に上がった人はゲームが終わるまでどれくらいの時間待つことになるのかを把握してもらった。同時に、試遊した中での気づきと改良点を書き出してもらい、次週までに改良しておくことを課題とした。

写真４

＜振り返りシートの記述＞

- 自分たちでつくったすごろくが実際に遊んでみて、想像していたよりも楽しくて驚きました。実際してみる前は子どもの予想される姿や配慮や援助が想像つかなかったのですが、実際してみて、スムーズに浮かんできて、実際にしてみることは大切だなと実感しました。
- 私たちのすごろくは、早くゴールした人が勝ちではなく、ポイントで勝負するものだけど、意外とルールが難しいかもしれないと思いました。
- すごろくをすることによって、友だちと話すことが多くなりました。すごろくの中で、一緒にサイコロの数字を言って、コマを動かすときに数えたり、なぞなぞはみんなで考え、喜んだり悲しんだりする気持ちを共有したりたくさんに言葉を言っていました。黙って黙々とすごろくをする人はいません。自然と言葉が出てくるのでたくさん声が聞こえました。ただゴールに向かってサイコロを投げるのではなくて、その中でたくさんに人との関わりがあるのだなと思いました。

(10) すごろくの実践（５歳児と）

Ｎ保育園の５歳児を招待して子どもたちとすごろくの実践を行った。（写真５）

４月には小学校１年生になる子どもたちが、このすごろくを通して数や量、文字をどれくらい認識しているか。その知識を使ってすごろくを楽しむことが出来るか。また、学生は事前に予想していた子どもの姿とどれくらいの違いがあるか。自分で考えていた配慮や援助が実際に必要か、実践できるのか。など、様々な課題を持って実践することが出来ていた。

＜振り返りシートの記述＞

- 最初の子どもたちは「６」の目が出たら“かさこじぞう”と言って、数字にまつわる何かを口にしていて、読めなくても何か自分が知っているものに関連づけて覚えているのかと聞いてて思った。
- 私たちの班では、おつかいすごろくというテーマだったため、魚や電車、ケーキなど、生き物や子どもたちが今までに体験してきたおつかいのエピソードなどを聞きながらすごろくを進めていったため子どもたちの日常生活で興味を持ったものについて知ることができ、楽しい雰囲気でゲームをすることができました。

写真５

- すごろくを実践するにあたって、いろいろな準備・環境構成をしてきたつもりでした。しかし、いざ始まってみると、計画通りにいかず、子どもにどう接していいのか悩むときもありました。

(11) すごろくの実践のふりかえり

実践の翌週、新設されたアクティブラーニングスタジオを使用して振り返りを実施した。いつもはテーブルに模造紙を広げ、その紙を取り囲むようにしながらポスターを作成してゆくが、今回は自立・移動式の小型ホワイトボードを前に全員が同じ方向から画面を見つつまとめの活動を行った。（写真６と７）

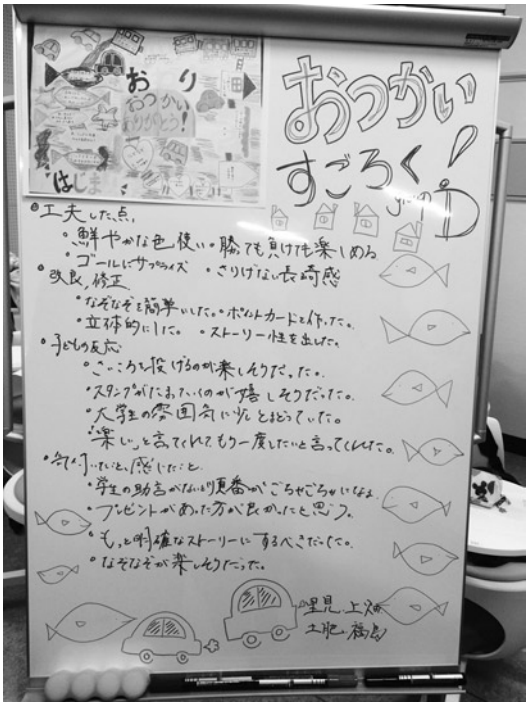

写真６

＜振り返りシートの記述＞

- まず自分の班のすごろくのまとめをしてみて、作る側としていろいろ考えたり工夫したりはしていたけれど、遊ぶ側の視点に立ってすごろくを作ったりはしていないと気がつきました。
- ほとんどの班がプレゼントを用意していて、子どもたちもすごろくを楽しんだ後、プレゼントをもらってさらに嬉しそうにしていてそこから話が広がってたくさん話が出来たので良かったと思います。
- 最初考えていた説明では、子どもたちに中身やルールが伝わりにくいだろうということで、説明

を画用紙に書いて表し、実際に遊びを見せて説明するようにすると、子どもたちがポイントの意味を理解し、ルールをわかった上ですごろくの遊びに参加してくれるようになった事が改善して良かったところでした。

- 数字、文字、どちらも使うすごろくでは、発達の差が大きく出るというのもまとめに多く挙がっていました。数字、文字を理解できると思い、その発達段階に合わせてしまうと、全員が楽しめるすごろくにはなりません。すごろくの内容もですが一人一人の子どもの発達段階を見極めて学生が助言や手助けをするというのも子どもが楽しんで活動するためには必要だと思いました。

２．考察

写真７

初回から最終回まで、その回に行った活動が次回へ繋がることを意識した内容で授業を繋いでいった。このことで、学生は次の活動を意識しながら目の前の活動を行うことができていた。ひとつの活動で完結するのではなく、全てが繋がってトータルの学びになることを授業後のリアクションペーパーから読み取ることができた。また、毎回行った色日記については、「今まで何気なく過ごしてきた身の周りの環境に意識して目を向けることで素敵な発見や気づきを得ることが出来、自分の知識が豊かになったり、感性が磨かれていったり、さらには自分が見る周囲の環境の存在がとても偉大に、そして深く感じられるようになった」という学生の感想に代表されるように、日常の環境に目を向ける楽しみを感じ、それを習慣化することができている。また、授業の冒頭にこの色日記の発表を行ったので、遅刻することなく授業出てこようというモチベーションの向上にも繋がっていた。さらに、体験活動を授業の中心に据えることにより動きながら考えることの重要性を感じてもらえることが出来ていた。

おわりに

全く先が見えないまま、手探りで準備を始めた授業であるが、全国保育士養成協議会第51回研究大会2012の中で示唆を頂いた先生方のおかげでひとつの流れを持った授業展開を作ることが出来た。領域「環境」はどの方向から見るかによっても様々なとらえ方が出来るので、これからも実践を組み合わせた授業内容を考え、展開してゆくことを心がけたい。

参考・引用文献

○香月欣浩　色日記をつけよう！ 全国保育士 養成協議会第51回研究大会2012
○岡野聡子・松田智子　領域「環境」における授業研究 全国保育士養成協議会第51回研究大会2012
○瀧直也・仲本美央・槇英子　絵本の世界を体感するプログラム開発　全国保育士養成協議会第51回研究大会2012
○保育所保育指針
○幼稚園教育要領
○幼保連携型認定こども園教育・保育要領